

科学研究費補助金「東日本大震災復興システムのレジリアンスと沿岸地域における津波に対する脆弱性評価」研究報告会を開催しました(2014/3/1-2)

テーマ：南海トラフ巨大地震による津波被害想定，美波町事前復興まちづくり
場所：徳島大学常三島キャンパス，美波町（由岐地区・日和佐地区）

2014年3月1日-2日に徳島県において、当研究所の村尾修教授（地域・都市再生研究部門 国際防災戦略研究分野）が研究代表者を務める文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 A）「東日本大震災復興システムのレジリアンスと沿岸地域における津波に対する脆弱性評価」の2013年度第3回研究報告会を開催しました。

初日は当該研究の研究分担者等と今年度の研究進捗報告を行いました（写真1）。

2日目は、南海トラフ巨大地震発生による津波被害が見込まれている美波町を視察しました。四国の南の海底にある水深 4,000m 級の深い溝である南海トラフは、非常に活発で大規模な地震発生帯です。徳島県では昨年、この南海トラフ巨大地震被害想定を公表するなど被害軽減に向けた予防対策、早期の復旧・復興に向けた具体的な対策を検討するための取り組みを行っています。

その中でも、阿南海岸沿いに位置する美波町では甚大な被害が懸念されています。今回の視察にあたり、美波町消防防災課の橋本一晴氏、美波町由岐支所地域振興室の浜大吾郎氏、徳島大学・美波町地域づくりセンター駐在員の井若和久氏が現地を案内して下さいました（写真2）。

東日本大震災から3年が経とうとする今、その教訓と課題を踏まえ、南海トラフ巨大地震に対して、どのように防災・減災対策を進めていくべきか、地域における関係機関の連携のあり方などについても議論しました。

また、美波町由岐湾内地区においては津波被害想定にとどまらず、過疎化・高齢化といった問題も抱えています。両者は密接に関係しており、事前復興まちづくり計画の策定に向けての取り組みも行っています。今回の美波町訪問の中で、津波防災とまちづくりに関する講演会およびワークショップの企画が持ちあがりました。今後の展開が期待されます。



写真1：研究報告会の様子



写真2：美波町視察時の薬王寺にて